

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	山本健介
論文題目	現代パレスチナの諸聖地をめぐる紛争とエルサレム (クドゥス) 問題 —パレスチナ人の権利認識と宗教・社会生活の動態を中心に—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東地域研究の一環として、現代中東における最も深刻な紛争であり続けているパレスチナ・イスラエル紛争を取り上げ、その中でも従来看過されてきた聖地をめぐる宗教的・社会的な対立の実態について考察したものである。特に、聖地問題の代表と言えるエルサレム問題を中心にしつつ、パレスチナの各地に散在する諸聖地を視野に入れて、宗教的な位置づけ、紛争の歴史的経緯、今日的な対立の構造、ありうべき解決策の可能性などについて、学際的な考察をおこなっている。</p> <p>第I部は「パレスチナ問題の中の聖地とエルサレム」と題して、聖地の視点を加えてパレスチナ問題を概観した上で、聖地のあり方、そこにおける対立の構造、諸聖地の中のエルサレムの位置づけなどを検討している。</p> <p>第1章は、パレスチナ問題の発生以来の概況と、パレスチナとイスラエルの双方で宗教復興が起きた1970年代以降の展開、従来の植民地主義とは異なる入植植民地主義がもたらしている新しい状況を、理論的な視座の展開と共に論じている。</p> <p>第2章では、パレスチナにおける聖地群を具体的に特定した上で、聖地をめぐる紛争を宗教的な聖地性と非宗教的重要性の両面から検討することの重要性を論じている。</p> <p>第II部は、「パレスチナにおける聖地問題の変容過程—オスマン帝国末期から現代まで—」と題して、研究対象となっている諸問題を歴史的経過と現代的状況を総合しながら論じている。</p> <p>第3章では、オスマン朝の解体期から英国委任統治期にかけて対立と紛争がどのようなものとして胚胎したのか、イスラエル建国を経て、1967年のイスラエル軍による東エルサレムの占領によってそれがどのように変容したのかを、主として「ステイタス・クオ原則」の誕生と発展を軸に検討している。</p> <p>第4章では、1970年代以降のイスラエルにおける宗教勢力の伸張と領土的支配への関心の高まりが、1993年のオスロ合意を契機として、新しい対立点と交渉過程に結びついた過程を明らかにしている。</p> <p>第5章では、2000年代以降の現況として、長引く占領が既成事実化することの意味と、パレスチナ人たちがその中で聖地へのアクセス権などの確保に腐心してきた状況が明らかにされている。</p> <p>第III部は、「現代エルサレムにおける聖地問題と社会の動態」と題して、オスロ合意以降現在に至るパレスチナ人社会の変容と聖地問題への取り組みが論究されている。</p> <p>第6章では、オスロ合意によって将来の独立への希望が高まり、またそれが数年して後</p>			

退する中で、パレスチナ人たちが自治権の拡大に努力する一方で、エルサレム問題が交渉プロセスから排除されていく過程が明らかにされている。

第7章では、東エルサレムにおける旧市街とその中核をなす聖域をめぐる、イスラエル側が管理権を強化する一方で、パレスチナ人の側が自分たちの権利意識を強めて聖地保全に取り組む対応を、具体的な事例から論じている。特にいわゆるイスラエル・アラブ人（イスラエル市民権を有するパレスチナ人）のイスラーム運動がエルサレムの従来からのパレスチナ人住民と連携し、聖地訪問運動などをおこなって聖地の社会・経済を再活性化しようとしている事例、あるいはイスラーム的な学習会や旧市街復興の運動などがおこなわれている実態がつぶさに描写され、分析されている。

結論では、中東における宗教的・政治的紛争、聖地という空間をめぐる対立の構造、国際関係学における紛争解決などの視点から、以上のような研究の成果を総括している。そのような総合的な理解を助けとして、民族問題に加えて、宗教的側面にも十分配慮した紛争解決を構想することの意義も強調されている。